



写真1 ジャパン・ストーン・フェア受付(左)と会場(右)のようす。

## ジャパン・ストーン・フェアを見学して

### 石との出会い

地質調査所の地質標本館には、日本はもちろんのこと、世界各地の石が展示されている。いつでも見学には行けるのに、余りの身近かさ故か、そこらにある石ころ位には思っても、その美しさには気付かないでいた。筆者は地質ニュースの編集事務局として2年近く様々な地質現象と接してきたつもりであるが、石や化石などの現物に接する機会は余り多くなかった。

このことに気付かされたきっかけが、今年5、7月号の石材の特集とストーンフェアの見学であった。これらの特集は、石原舜三氏(前所長、現在工業技術院長)の企画によるもので、筆者にとっては石原氏との出会いが石との出会いであったと言ってもよい。

### 石に魅せられて

石原氏に日本の石、外国の石の現物を見せていただき、興味の湧く、楽しいお話を伺った。地質学的には、日本のみかげ石は年代が新しく、色は白っぽいものが多い。それに比べ北欧などの石材は、同じみかげ石でも年代が古く鮮やかな色をしている……などなど。筆者はだんだん石に魅せられてしまった。

### ジャパン・ストーン・フェア

そんな時、「ジャパン・ストーン・フェア・インターナショナル'91」が7月11日(木)から14日(日)まで千葉県の日本文芸センター(幕張メッセ)で開催され、地質ニュースの販売や購読募集も行われた。

広い会場は人で埋まり、沢山の出展を見ると目が回りそうな感じだった。石の製品だけでなく、加工機械などから宝石まで展示され、デザイナーと思われる若い女性までが詰め掛ける活気を呈していたのは、予想外であった。石の用途の多様さと美しさ、そしてそれらを作り出

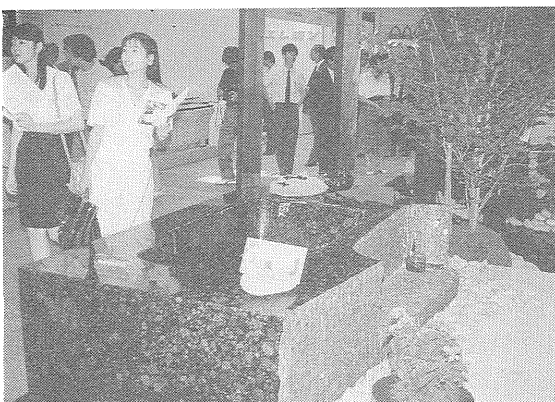


写真2(上) 石の多様な用途のひとつ。モダンな浴槽。



写真3(左) 地質ニュース販売コーナー。

す新技術に驚いてしまった。石の重さはそこにはなく、地球の構成物というイメージから離れて、華やかな舞台上で踊っているかのようであった。ストーンフェア事務局の集計によると、出展は国内202社、海外165社(22か国)、合計367社で、入場者も3万人を越えたとのことである。

(地質ニュース事務局(総務部広報係))

文：山口秀樹；写真：斎藤賢二